

鬼と土木の民俗学的考察

中尾 聡史¹・森栗 茂一²

¹正会員 京都大学大学院助教 工学研究科 (〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂 4)

E-mail: nakao@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

¹正会員 大阪大学コミュニケーション・デザインセンター教授 (〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-16 全学教育総合棟 I)

E-mail: morikuri@cscd.osaka-u.ac.jp

本研究では、歴史の陰に埋もれてきた土木技術者について、私たちの生活文化である民俗の視点から考えてみた。まず、民俗学での議論を整理しながら、土木技術者が、定住農業民（常民）ではなく、非常民として認識されていることを指摘した。また、非常民は常民から異人視される立場になり、伝承の世界では、妖怪として表現されていると指摘されていることを述べ、こうした非常民、非農業世界の分析において、若尾五雄の論考が重要であることを述べた。次に、宮本常一の論考や、五郎兵衛用水の事例を取り上げながら、土木技術と鉱山技術の関連性について論じた。そして、若尾の鬼伝説の研究に着目しながら、大分県豊後高田市の熊野神社に伝えられる石段にまつわる鬼伝説を取り上げ、土木技術者が鬼と呼ばれてきた可能性があることを指摘した。

Key Words: *folklore, civil engineer, oni*

1. はじめに

日本の津々浦々を生涯にわたって歩きまわり、庶民の生活に目を向けてきた民俗学者、宮本常一は、『生業の歴史』と題した著書の中で、次のようなエピソードを紹介している¹⁾。

「土木建築の工事がなされても、讃えられるのはその工事を直接担当した大工や石工ではなく、その工事を計画し出資した人であった。私はかつて熊本県の石橋を調べて歩いたことがあった。熊本県の山間部には目を見晴らせるようなすばらしい石橋がいくつとなくある。それが深い溪谷の上にかかっている。それらの石橋をかけるために苦心して資金を集め、計画した人の名は今もよく伝えられまた人にも知られている。矢部町の通潤橋という見事な石橋をかけた布田保之助の名は県下に知れわたっている。しかしその直接橋の工事を行った石工たちの名を記憶している人は少ない。」

橋や堤防、ダム、道路などの土木構造物は、私たちの生活を支え、暮らしを豊かなものにしてきた。しかし、土木事業を計画した人物や出資した人物について、取り

上げられることがあっても、宮本の言うように、現場で汗を流した土木技術者については、あまり注目されて来なかった。

そこで、本研究では、歴史の陰に埋もれてきた土木技術者について、私たちの生活文化である民俗の視点から考えてみたい。特に、非農業文化の研究にいち早く取り組んだ若尾五雄の鬼伝説の分析に着目しながら、土木技術者の歴史に迫ることとする。

2. 民俗学における土木技術者の位置づけ

ここではまず、民俗学の動向を簡単に整理する中で、民俗学における若尾五雄の民俗研究の位置づけを記しておく。そこで、(1)では民俗学について、(2)では民俗学の基礎概念とされる常民について説明した上で、(3)では民俗学において土木技術者がどのような位置づけにあるのかを明確にし、(4)では、若尾五雄の民俗研究の位置づけを示すこととする。

(1) 民俗学とは

a) 土木学会における民俗学の動向

近年、土木学会において、「民俗」の重要性が認知さ

れ始めている。2011年の土木学会誌では、東日本大震災において「てんでんこ（てんでんばらばらに逃げろ）」という三陸地方に伝承されてきた言い伝えによって、岩手県釜石市の住民の迅速な避難行動が成し遂げられたことが、当該地域の防災教育に尽力した片田敏孝によって紹介されている²⁾。「てんでんこ」という言葉は、明治29年(1896)の明治三陸地震や昭和8年(1933年)の昭和三陸地震の大津波を経験した世代よりもさらに上の世代から語り継がれてきたものであり^{3) 4) 5)}、まさに、津波による被害を経験してきた人々の知恵が込められた民俗知であると言える⁶⁾。

また、防災面だけでなく、合意形成やまちづくりなどの場面においても、民俗知を視野にいれていこうという主張が、特に土木計画学の分野で提出され始めている。例えば、森栗⁷⁾は、民俗学者である宮本常一の『忘れられた日本人』に記されている「対馬にて」の衆議の描写をもとに、日本の衆議の歴史変遷を見直し、その長所と短所を指摘しながら、現在におけるまちづくりの場での議論の在り方を模索している。また、藤井⁸⁾は、公共政策全般において物語が如何に援用可能であるかを説く中で、民俗学の実践的な性格に着目している。そして、地域に伝承されてきた民話などをもの語り、またそれに耳を傾ける行為が、地域内のコミュニケーションを促進させ、地域の活性化をもたらし得ることを指摘している。このように、我々の生活の中にある民俗を見つめ直し、土木計画を展開していく中で民俗を活用していくことが、重要視されつつある。

土木の歴史を調査する土木史研究の分野においては、土木史研究をより広く発展させる交流の場としてニューズレター「土木史フォーラム」が1995年に発刊されており、その創刊号の冒頭に、土木史研究と交流していくことが不可欠な学門の一つとして民俗学が挙げられている⁹⁾。しかし、これまでの土木史研究において、民俗学の文献を補足的に引用する研究は多少見られるものの、民俗事象を積極的に扱ったものは極めて少ない。土木史の分野において民俗学を扱うには、そもそも民俗学がどのような性格を持つ学問なのかを理解することから始める必要がある。

b) 民俗学の目的

民俗学は、フォークロア(folklore)と呼ばれるが、フォークロアが誕生したのは19世紀中頃のイギリスにおいてである。産業革命が進行し、急速に伝統的なものが失われていく中、古い生活文化への関心が高まり、民俗研究が開始された。そして、日本においても、近代化の発展の中で、農村が疲弊し、長年蓄積されてきた文化や伝統、また、それに対する誇りが急速に廃れつつあった昭和初期、柳田国男によって民俗学が提唱された。柳田は西欧

のフォークロアを咀嚼し、日本独自の民俗学を完成させたのである¹⁰⁾。

柳田に対する批判は様々にあるが、もし柳田が存在しなければ、今日の民俗学は存在しなかったことは否定できない事実であり、その意味で、柳田国男を語らずしては民俗学を語ることはできない。そこで、ここでは、柳田国男に着目しながら、民俗学について述べていくこととする。

柳田が民俗学の方法論について論じた数少ない著書の中の一つである『郷土生活の研究法』で、柳田は民俗学の目的を次のように記している¹¹⁾。

「郷土研究の第一義は、手短かに言ふならば平民の過去を知ることである。社会現前の実生活に横はる疑問で、是まで色々と試みて未だ積み得たりと思われぬものを、此方面の知識によつて、もしや或程度までは理解することが出来はしないかといふ、全く新らしい一つの試みである。平民の今までに通つてきた路を知るといふことは我々平民から言へば自ら知ることであり、即ち反省である。」(p.202)

我々の生活の中で生じる問題はことごとく過去に形成されたものであり、それゆえ、過去を知らなければ、現在を理解することはできない。柳田は、眼前の問題解決のために、現在と連続している「平民の過去」を知る重要性を説いた。「平民の過去」を知るとは、まさに「自ら知ること」であり、自己省察、すなわち自らの過去を振り返る「反省」が必要とされるのである。

柳田¹²⁾が「我々の学問は結局世の為人の為でなくてはならない。即ち人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識であり、現代の不思議を疑ってみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである」(pp.216-217)と述べるように、民俗学とは、現実問題の解決のために、「平民の過去」の「反省」を試みる学問、すなわち「内省の学」なのである。

宮田登¹³⁾もまた、「私たちの日常のごくあたり前と思われる行動やものの考え方を生活文化とか生活意識といったりするが、それを歴史的に再構成して、文化論的意味づけを考え、歴史的現在としてとらえようとするのが民俗学の一つの目的である」(p.218)と述べるように、民俗学とは、現在の我々の生活の中に息づいている歴史を導き出す学問であると言える。すなわち、民俗学は、世代的伝承性をもって近代まで引き継がれてきた遺習としての慣習や民話などの民俗を史料として、人々の生活の歴史過程を捉えようとする学問である。

(2) 常民とは

柳田は民俗の担い手として「常民」という概念を持ち

出している。この「常民」とは、柳田による造語であり、学史上、さまざまな議論がなされているが、一応の共通理解として、実体概念と抽象概念があるとされている¹³⁾。ここでは、混乱を避けるため、実体としての「常民」について言及したい。

柳田が民俗学の方法論について論じた数少ない著書の中の一つである『郷土生活の研究法』(1935)において、「常民」とは次のような分類に従って説明される(pp.301-303)¹⁴⁾。村落の構成員は、「上の者」「下の者」そしてこれらの中間にあたる「常民」の3つの階層に区分できる。「上の者」にあたるのが、「いゝ階級に属する所謂名がある家で、その土地の草分けとか又は村のオモダチ(重立)と云はれる者、或はまたオホヤ(大家)・オヤカタ(親方)などゝ呼ばれてゐる階級」であり、江戸時代の半ばまで村の中心勢力をなしていた階級である。一方、「下の者」にあたるのが、「普通の農民でなく、昔から諸職とか諸道などゝいつて、一括せられてゐた者」であり、具体的には「鍛冶屋、桶屋など、これらは何れも暫くづつ村に住んでは、また他に移って行く漂泊者」である。そして、この二つ階層の中間にあたるのが、村の住民の大部分を占めていた「極く普通の百姓」であり、これが「常民」である。

すなわち、「常民」とは、日本人の大半を占めていたとされる水田稲作に従事する農業民のことであり、中世末から近世にかけて平地部に定着し、江戸時代には日本人の人口の約7割を占めていたとされる人々のことを指す¹⁵⁾。柳田は、日本の人口の大半を占めていたこの「常民」の持つ民俗体系に着目すれば、総体的な日本文化も捉えられると考え、1930年代頃から「常民」に焦点をあてるようになったのである¹⁶⁾。つまり、柳田は、日本文化を為政者の側からの視点ではなく、「常民」の側から捉えようとして膨大な著作を残した。この「常民」に焦点をあてることで、日本人の家制度や祖先に対する観念の分析において柳田民俗学は、大きな成果を収めたのである。

(3) 非常民とは

さて、定着農業民である「常民」に対して、先述の分類の「下の者」に当たる非農業民、特殊職業人のことを民俗学では「非常民」と呼ぶことがある¹⁷⁾。定住をせず、各地を放浪し生計を立てた人々も存在した。家財道具を背負い集団で山間水辺を漂泊し、箕づくりを生業としたサンカ(山窩)や、山中において轆轤をひいて器を作り、良材がなくなると他に移動して生計を立てた木地師などがこれにあたる。後年の柳田民俗学において、常民研究が主流となり、この非常民に対する研究が十分になされてこなかったことは、しばしば指摘されることである¹⁸⁾。宮田¹⁹⁾は、「こういう初めから除外する部分があ

った上で常民が存在するのであり、こうした常民を主流とした日本民俗学は、当初から一つの限界をもってきているといえる」(p.244)と従来の民俗学を厳しく批判している。ただし、前期の柳田民俗学においては、『遠野物語』(1909)、『山の人生』(1926)に代表される「山人」研究や、『所謂特殊部落の種類』(1913)『毛坊主考』(1914)などの「特殊部落」研究が行われており、決して非常民に関する研究が等閑視されていた、というわけでもない。

こうした非農業民を扱った前期の柳田民俗学の中でも、特殊部落研究において、土木技術者に関する若干の記述がみられる。柳田は、一貫して非常民に対して「漂泊者」という分類の中で捉えているが²⁰⁾、『毛坊主考』(1914)において、井戸掘りや池作りなどの特殊な土木技術を携えた人々を漂泊する非常民であることを示唆している(pp.363-365)²¹⁾。また、比較的早い段階において、こうした指摘を行ったものとしては、民俗学者でありながら日本銀行総裁を務めた渋沢敬三(1896-1963)の「本邦工業史に関する一考察」(1933)が挙げられる。渋沢は、土木技術者をもった「黒鍬」や「河原者」などを、特殊な工業に関わっていた漂泊民として捉えており、彼らは「特殊部落の人民であり「下り職」として卑しめられ」ていたと述べている(pp.263-265)²²⁾。このように、民俗学において、土木技術者は、定着農業民である常民の枠から外れた者であり、特殊職業人、漂泊民などの非常民として理解されているのである。

しかし、先述したように、1930年頃から柳田の関心は常民の研究に注がれるようになり、また、民俗学が柳田によって主導されてきたこともあり、民俗学において非常民に対する研究が十分になされてこなかったと言える。市川²³⁾は、これまで「工事現場で実際の作業に従事した無名の人々の歴史についてはほとんど研究の目が向けられることはなかった」(p.1)と指摘するが、非常民である土木技術者に関する研究が遅れているのは、民俗学が常民を研究の基本的対象としたことと決して無縁ではなであろう。

1980年頃になり、ようやく中世賤民史や技術史の立場から土木技術者に関する比較的まとまった研究が、三浦¹⁹⁾、²⁰⁾によって提出されるようになる。三浦もまた、土木技術者は、交通の要衝を拠点として活躍した「坂の者」や「河原者」といった非農業的集団であることを推察している(pp.35-39)²⁴⁾。三浦²⁵⁾は、1936年に土木学会から提出された『明治以前日本土木史』の論調が「土木工事に専従する社会集団はまだ成立しておらず、土木工事は、農民による農業労働の延長としてとらえることができる」(p.124)という見解に基づいていることに疑問を呈し、中世における土木工事を専業とする社会集団の存在を指摘した。

ただし、市川²⁶⁾は、こうした三浦の研究にも、史的

な問題から一定の限界があることを指摘している。史料
的な限界がある中で、市川は、近世尾張で活躍した土木
技術者である黒鋸が、中世の京都で活躍した下級の陰陽
師(千秋万歳など多様な芸能を身につけた非常民)の系譜
にあることを推察している。地鎮の呪術を持つ陰陽師が、
その呪術的能力から土木工事に関係しており、結果とし
て土木技術を持ち合わせていた可能性を示唆し、この土
木技術が黒鋸へ継承されたことを、断片的な史料と伝承
から見出している。そして、市川は、「日本の土木の歴史
を考える時、呪術性と差別の問題は、かかすことので
きない重要な要素として強く認識されるべきであろう」
(p.12)と、土木技術者に関する歴史民俗研究に対して重
要な視点を提示している。

市川の研究に先立って、近世における日本人の自然観
と開発について説いたのが三鬼清一郎の研究²⁴⁾ ²⁵⁾である。
三鬼²⁶⁾は、日本において古くから地鎮の祭儀が執り行わ
れていた事実から、「土地には地の神が宿り、それを含
めた自然界すべてに神々が宿る」(p.181)と考えられて
いたことを指摘し、日本において「自然景観に人為的変更
を加えることは、地の神の怒りにふれることと観念され
ていた」(pp.181-182)ということを推察している。そして、
こうした観念があったがために、地鎮の呪術を持つ下級
陰陽師が近世初期における開発に動員されていたと推察
している。

(4) 若尾五雄の民俗研究

文化人類学の立場から民俗学に接近した小松和彦は、
定住民である常民にとって、彼らの世界の外部に住み、
様々な機会を通じて接触する非常民は、異人視される立
場にあるとの見解に立った上で、異人である非農業民の
存在が妖怪にまつわる民話を創り出す一つの大きな基盤
になっていると指摘している²⁴⁾ ²⁵⁾ ²⁶⁾ ²⁷⁾。そして、小松
は、妖怪の中でも河童に関する民話には、土木事業に実
際に関わった河原者や非人などの非常民の姿が暗示され
ていることを示唆している。河童の民話の背後に実在し
た土木技術者の姿があるという着想をいち早く提示した
のは、産婦人科の開業医でありながら、非農業的世界の
民俗研究に励んだ若尾五雄である。

若尾五雄は、民俗学会において、あまり注目されるこ
とはなかったが、早くも1950年代から非農業文化研究に
着手していた異端の民俗学者である。若尾の研究対象は、
河童といった妖怪をはじめ、橋姫、人柱、えびす、犬飼、
妙見など、非農業世界、特に土木と関わりのあるものが
多い。柳田国男の民俗学の主となすものは農業世界であ
ったが、若尾の民俗学は、非農業世界から歴史を見ると
ころにその特徴がある。そして若尾の民俗研究のもう一
つの特徴は、「それぞれの伝承の底流にはいろいろの思
いやそれぞれの背景を持つ、つまり史上の事実の一部が

織り込まれて伝えられて来ているのが伝説だと思わねば
なりません」(p.171)²⁸⁾と若尾が語るように、民話が語り
継がれる背後には、それを裏付ける地理的・歴史的な事
実が存在すると思ふところにある。若尾は、徹底した
フィールドワークを行い、地域に残る伝承の背後にあ
る地理的・歴史的な事実を追い求めたのである。こうした
若尾の研究は、河童が土木技術者を示唆していたという
研究²⁹⁾に見られるように、地域に残る伝承や伝説を、土
木という非農業世界と結び付けて、職能集団や技術の歴
史を推測する視点にあふれている。

本研究では、この若尾五雄の研究に着目しながら、土
木技術者の実相に迫ることとしたい。

その準備として、次章で、土木技術と鉱山技術の關係
について、宮本常一の論考を中心に引用しながら論じ
ることとする。その上で、4.において、若尾の鬼伝説の研
究に着目し、土木技術者の実相に迫る。

3. 土木と鉱山技術

本章では、土木と鉱山技術の關係について論じる。

(1)では、宮本常一の論考を引用して、(2)では、五郎兵
衛用水を題材にして、土木と鉱山技術の關連を論じる。

(1) 宮本常一の調査

築堤と鉱山開発では、おなじ尾張鋸という名の鶴嘴形
の工具が使われるように、土木技術は、鉱山技術と類似
点が多い。土木と鉱山技術の關係について、宮本常一は
このように述べている³⁰⁾。

「中国山地とか中部地方の山中には黒鋸師というのがお
ったんです。黒鋸師というのは鉄山とか銅山で働いてお
った人です。中部地方の西部、つまり美濃の国、越前の
国、そのあたりは金がたくさん出ましたし、銅がでまし
た。それを掘るために黒鋸師が出てきたわけです。その
人たちが、やがて銅が出なくなったときに平野へ下っ
てきて、いろんな土木工事をやるようになります。濃尾平
野にたくさん川が流れておる。そうして見事な堤防が残
っておる。自分らの村を守るために、輪中と言われる堤
防が、多いときには二〇〇を超えるほどあったのですが、
それを築いたのはじつは黒鋸師です。それがひとつの景
観をつくり出していった。」(p.259)

このように宮本は、黒鋸師が鉱山師としても土木技術
者としても活躍していたことを指摘している。宮本は、
他にも、出身地である周防大島(山口県久賀町)の棚田
の石垣を築き上げた土木技術者を調査する中で、この付
近に「鑄物師原」という地名があることや、梶田(鍛冶
田)や梶谷(鍛冶谷)などの姓を持つ家が多く存在する

ことを発見し、次のような考察を行っている³⁰⁾。

「砂鉄精錬には砂鉄を掘る者、たたらで働く鑄物師、鍛冶屋で働く鍛冶、炭焼き、荷持ちなど多くの技術者や労働者を必要とするが、砂鉄堀の仲間は職業がら土木工事にたくみで、砂鉄を掘らないときは開拓事業にやとわれて方々をわたり歩いたもので、普通に黒鉄師といわれた。砂鉄に限らず、金、銀、銅など掘る者もみな開田にしたがったものである。とくに鉾山へ働かなくなると、開田や石垣積みにやとわれて、そういう仕事にのみ専念するようになっていく。久賀の人びともそのためであろうが石垣積みと土木仕事にたくみで、早くから西日本各地を放浪して歩いたのであった。」(p.212)

こうした宮本の指摘から、築堤や石垣積みなどの土木技術と鉾山技術との関連性が窺えるであろう。

(2) 五郎兵衛用水

他にも鉾山技術と土木の関連を指摘したものとして、川元翔一の五郎兵衛用水の研究がある。

五郎兵衛用水（長野県佐久市）とは、江戸時代初期(1624~1643年)、水田開発のために市川五郎兵衛真親によって開削されたとされる全長約 20 キロメートルにも及ぶ用水路のことである。用水路は、三つの山を貫いており、その中でも一番長い片倉山隧道は東西に 320 メートルにも及んでおり、山の両側から掘り進められたと言われている。

川元³²⁾は、この五郎兵衛用水の隧道掘削の過程を物語にするため、山の両側から掘り進めて、地中で結ばれる隧道の掘削技術・測量技術について調査を始める。そして、江戸時代中期に、五郎兵衛用水の隧道が崩れた際に、小諸藩に出された請求書に、修復工事をするのには「金堀（金山衆）」が数名必要であること、その理由として隧道をまっすぐ掘り進むには「金堀（金山衆）」の技術でしかできないことが書かれていることを発見する³³⁾。そこで、川元は、佐渡の金山の調査を行い、鉾山労働者が鉾道を掘り進めていく途中で酸欠によりバタバタと倒れる現象が起こること、佐渡ではこの現象を「ケダへ」と呼んでいることを発見している。この「ケダへ」を防ぐために、金堀は、外部から地中の鉾道に向かって最短距離で空気穴を掘り当てる技術を持っており、この技術が、五郎兵衛用水の山の両側から掘り進める技術に転用された可能性を川元は推測している。つまり、金堀の持つ鉾山技術が五郎兵衛用水の隧道掘削という土木技術に転用されていたというのである。斎藤³⁴⁾もまた、市川五郎兵衛の市川家が、甲斐の金山衆か、それに近い存在であったことを指摘しており、甲斐の金堀が五郎兵衛用水の掘削工事に関わった可能性を示唆している。ちな

みに、甲斐国内およびその隣接地域の金山開発が、武田信玄の時代に急速に展開したことはよく知られているが、そこで展開された技術と、信玄の時代およびそれ以降における築堤治水技術もけっして無関係ではない。小葉田³⁵⁾もまた、「甲斐は急流が多く、築堤治水の土木工事は信玄時代に注目すべきものであったが、これらの土木技術は鉾山技術と深い関係がある」(p.52)と述べており、金堀集団と土木集団との近似性を主張している。

さて、川元は、五郎兵衛用水の土木工事に関わった技術者として、金堀を挙げているが、その他にも石切（石工）の存在を指摘している。というのも、五郎兵衛用水を計画した市川五郎兵衛の本家市川家が、上州砥沢村で砥石山の経営をし、砥石を生産していた事実があり、そこで働いていた石切（石工）が用水路開削という土木工事に導入されていた可能性が推測できるからである。斎藤³⁶⁾もまた、五郎兵衛用水を掘削したのは、「金堀ないしは石切だったことはまちがいないのではないか」(p.64)と推察している。つまり、五郎兵衛用水の開削工事に関わった人々は金堀や石切(石工)といった非常民であり、特に金堀（金山衆）の持つ鉾山技術が、五郎兵衛用水の隧道掘削に活用された可能性が考えられるのである。

こうした特殊な技術を持った非常民は、需要に応じて飛び回り、井戸や隧道を掘ったり、堤防を作ったり、さらには鉾山開発にも関わったのであろう。土木技術者は鉾山師でもあり、鉾山師は土木技術者でもあった。

さて、この鉾山師であるが、若尾五雄によると、彼らは鬼と呼ばれていたことが指摘されている。そこで、次章では、若尾の鬼伝説の研究を引用しながら、鬼と土木の関連を論じることとしたい。

4. 鬼と土木

本章では、(1)において若尾の鬼研究について説明し、(2)では、議論を発展させて、鬼と土木の関連性を考察していくこととしたい。

(1) 若尾五雄の鬼研究

本節では、若尾の鬼研究についてみていく。ここでは特に、若尾の著書『鬼伝説の研究』(1981)³⁷⁾『金属・鬼・人柱その他』(1985)³⁸⁾に着目することとしたい。

若尾の鬼研究は、若尾の妻の実家が、鬼伝説の残る佐佐福神社（鳥取県日野郡日南町）であったことに端を発している。佐佐福神社には、孝霊天皇が日野郡にやってきて、人民を悩ませていた鬼を退治したという鬼退治の伝説が残っている。若尾は、なぜこの地域に鬼伝説が残っているのかを調べていく中で、この地域が一大砂鉄地帯であるという事実に着目する。また、この日野郡は、

現在の広島県と岡山県の県境にあり、桃太郎の鬼退治で有名な吉備国に接している。桃太郎の鬼退治とは、宝物を盗んだ悪人の鬼を、桃太郎が退治して宝物を取り返しに行くという話であるが、若尾は、ここで、鬼は宝物を奪ったのではなく、鬼の住むところにこそ、金、銀、鉄、珠玉などが眠っているのではないかと考える。そして、若尾は、吉備津神社の官司に話を聞き、やはり予想通り、吉備国が金工地帯であるという事実にとり着く。

若尾は、さらに、鬼退治伝説の一つである丹波国大江山の酒呑童子伝説にも着目し、現地に行って調査し、大江山が一大鉱山地帯であることを突き止めている。その他にも若尾は、鬼が語られる神社仏閣や鬼の名前がつく地名には鉱山が関係していることを例示し、鬼とは、金、銀、鉄を掘り起こす鉱山技術を持った鉱山師である可能性を指摘している。若尾は、中国・近畿地方だけでなく、全国的に踏査し、様々な根拠を示しながら、鬼と金工が深い関係にあることを論じている。こうした若尾の鬼研究は、単なる民話構造研究ではなく、歴史的にも実証される鉱山技術者集団の実相に迫るものである。

若尾も述べているが、鬼退治伝説の残る地域すべてにおいて、鬼すなわち鉱山師を追い払うようなことがあったと必ずしも言えない。しかし、鉱山という異界に住む非常民を異人と捉え、時に畏怖する精神文化が日本において存在していたことを、こうした鬼伝説は暗示していることが考えられるのである。

(2) 鬼が作った石段

3. において、宮本常一の論考や五郎兵衛用水の事例から鉱山技術が隧道掘削の土木技術に転用されていたことを指摘したが、非常民である鉱山師が鬼と呼ばれていたことを考えると、土木技術者が鬼と呼ばれてきた可能性は十分に考えられる。ただし、筆者らのこれまでの研究では、鬼が土木工事を行ったという伝承や伝説を採集することができていなかった。

しかし、鬼と土木の関連を直接的に示唆するものとして、大分県豊後高田市の熊野神社に、石段にまつわる鬼伝説が存在した。その伝説の内容は、以下の通りである（現地案内板）。

この田染の里に毛むくじらの赤鬼がやってきて、人間を食べるといいます。それを聞いた熊野の権現さまは、何かよい方法はないかと考えました。そして、いち夜のうちに百の石段をこしらえたら許してやろうと約束したのです。権現さまは、とうていできるはずはないと思っていたのですが、なんと赤鬼は、ひよいひよいと石を担いで、あっという間に五十段こしらえました。その早いこと早いこと、みるみるうちに九十九段築いたのでした。おどろいた権現さまは、百段目の石を担いだ赤鬼の足が

山かげに見えたとき、「コケッココー」とにわたりの鳴き声をまねしたのでした。赤鬼は、「負けたあ」と最後の石を担いだまま逃げ出していったそうです。

このように一種の土木工事である石段づくりを鬼が行ったという伝説が残されていた。そして、この石段は架空のものではなく、熊野磨崖仏へと続く階段として現に存在し、今なお参拝客に利用されている。石段が存在しているのであるから、石段を作った土木技術者が実在していたはずである。そして、その土木技術者が伝説上、鬼と表現されているのである。

鬼が石段を築いたという同様の話は、筆者らが調査した限り、福岡県豊前市国玉神社、大分県別府市八幡竈門神社、宮崎県都城市東霧島神社にも存在している。九州以外であれば、秋田県男鹿市赤神社にも存在している。そして、いずれの地においても、鬼が作った石段が現存している。なお、この石段にまつわる鬼伝説について、若尾は採集することができておらず、もちろん分析もなされていない。

ここで、注目したいのが、八幡竈門神社を除いて、これらの地がいずれも修験道と関わりのあることである。若尾の鬼伝説の研究には、この修験道に関する考察も含まれている。それは、次のようなものである。

修験道とは、現代においては、経文を唱え、法螺貝を吹き、護摩を焚き、山々を回峰する行法であると考えられているが、本来は、錬金術といって水銀から黄金を採り、これを服用すれば永遠の生命が得られるとして、山中の金属を探し回った行法であると若尾は指摘する。修験の根本道場である奈良県吉野山がなぜ、修験道場に適していたのかと言えば、吉野山は、水銀鉱床の上であり、修験者が水銀を採取するのに適しているからである。若尾は、吉野山の他にも、修験道の古い行場は金属が産出する場所であることを発見し、修験と鉱山の関連性、そして、修験者と鉱山師の関連性を指摘している。さらに、若尾は、吉野郡において、鬼の子孫だと言い伝えられている家がいくつか存在していることから、修験（鉱山）に関わる者が鬼と表現されてきた可能性を示唆している。もちろん、吉野だけでなく、鬼の子孫と称する家々が日本各地にあることにも若尾は着目しており、それらの地においても、修験や鉱山との関連が見いだせることを説いている。そして、こうした地において、節分の豆まきの際には、「福は内、鬼も内」と掛け声をかけるなど、鬼は追い回される存在ではないのである。柳田国男もまた『毛坊主考』の中で、鬼の一部に、山人や漂白の人々の存在があることを指摘している。

さて、鬼の作った石段の伝説の残る国東半島田染であるが、この地もまた六郷満山と呼ばれ、修験の地とされている。六郷満山の寺院では、旧正月に、修正鬼会と呼

ばれる火祭りが行われ、鬼たちは、松明や斧を振りまわして踊り、やがて参拝人と輪をつくる。このように国東半島の鬼も、この地においては、追い回されて、叩きのめされる鬼ではない。若尾によれば、国東半島の北部にある鬼籠と呼ばれる地には、鉾山との関連を示唆する鬼伝説が言い伝えられている²⁹⁾。

「行平（豊後行平，紀新太夫行平ともいう）は英彦山で三千八百坊の刀を精錬した僧定秀の子孫とも弟子ともいわれる。一介の山伏鍛冶なのに後鳥羽上皇の御番鍛冶に選ばれた名鍛冶であった。鬼籠にはその遺跡がいろいろ残っていて、近くの雲崎というところには良質の砂鉄が出る。行平が主連縄を張りひそかに刀を打っているところを村人覗いて見ると、向鏑は顔を真赤にした鬼であった。見られたと知った鬼はその夜のうちにふいごをかついで逃げたが、そのとき手をついた、その手形が石の上に残っている。」(pp.59-60)

一種の土木工事である石段づくりを鬼が行ったという伝説が残される田染近辺では、このように、修験道があり、鬼と呼ばれた人々が鉾物を採集していた可能性が考えられるのである。また国東半島には、卓越した技術をもった石工が多く存在しており、石段づくりを行った技術者との関連性が窺える。本研究における調査のみで明言はできないが、鬼と呼ばれた鉾山師や修験者の鉾山技術が、土木技術に転用されてきた可能性は極めて高いと考えられるのである。

4. おわりに

(1) 本研究のまとめ

本研究では、歴史の陰に埋もれてきた土木技術者について、私たちの生活文化である民俗の視点から考えてみた。

2.では、民俗学での議論を整理しながら、土木技術者が、定住農業民（常民）ではなく、非常民として認識されていることを指摘した。また、非常民は常民から異人視される立場になり、伝承の世界では、妖怪として表現されていると指摘されていることを述べ、こうした非常民、非農業世界の分析において、若尾五雄の論考が重要であることを述べた。

3.では、宮本常一の論考や五郎兵衛用水の事例を取り上げながら、土木技術と鉾山技術の関連性について論じた。そして、4.において、若尾の鬼伝説の研究に着目しながら、大分県豊後高田市の熊野神社に遺る石段にまつわる鬼伝説を取り上げ、土木技術者が鬼と呼ばれてきた可能性があることを指摘した。

史料的な限界がある中で、非農業世界に生きた土木技

術者の姿を追うには、本研究が示したように、若尾五雄のもつ民俗研究の視点が大きい役に立つであろうと考えられる。本研究では、若尾の鬼の研究に着目することで土木技術者の歴史に迫ったが、若尾の研究対象は、鬼や河童といった妖怪だけではなく、松浦佐用姫の人柱伝説や土木工法などの非農業世界に及んでいる。こうした若尾五雄の遺した民俗研究（スキーム）を利用することで、これまで解釈が困難であった土木にまつわる伝承を読み解くことが可能になっていくと考えている。

(2) 今後の課題

本研究では、大分県国東半島に遺る石段にまつわる鬼伝説を取り上げたが、九州地方には石橋や石塔が多く遺されており、これらを築いた石工と、この石段を築いた技術者との関連について考察していく必要がある。大分県院内町にも、石橋が多く遺されているが、一種の土木技術者である陰陽師のことを院内と呼ぶことがあり、この地名と土木技術者との関連も興味深い。また、本研究でも記したように、石段にまつわる鬼伝説は、九州地方を中心に他にも存在しており、それらの分析も必要である。

謝辞

本研究は、公益財団法人京都大学教育研究振興財団の後援を得て行われたものであり、この場を借りて感謝を申し上げる。

参考文献

- 1) 宮本常一：『生業の歴史』，未来社，1993。
- 2) 片田敏孝：記事5 インタビュー 釜石市における津波防災教育—市内小中学校の子どもたちを救う—，土木学会誌，Vol.96，No.8，pp.23-28,2011。
- 3) 山下文男：津波—TSUNAMI，あゆみ出版，1997。
- 4) 山下文男：津波の恐怖—三陸津波伝承録，東北大学出版会，2005。
- 5) 山下文男：津波てんでんこ—近代日本の津波史，新日本出版社，2008。
- 6) 矢守克也：「津波てんでんこ」の4つの意味，日本災害科学，Vol.31，No.1，pp.35-46，2012。
- 7) 森栗茂一・板倉信一郎：忘れられた衆議～日本の合意形成のこれまでとこれから～，土木計画学研究講演集，Vol.51，No.350，2015。
- 8) 藤井聡・長谷川大貴・中野剛志・羽鳥剛史：「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義，土木学会論文集 F5，Vol.6，No.1，pp.32-45，2011。
- 9) 武部健一：「土木史フォーラム」の発刊に寄せて，土木学会土木史研究委員会ニューズレター，創刊号，p.1，1995。
- 10) 福田アジオ：「民俗学の目的」，福田アジオ・小松和彦編『講座日本の民俗学 民俗学の方法』，雄山閣

- 出版, 1998.
- 11) 柳田国男：『柳田国男集 8』, 筑摩書房, 1998
 - 12) 宮田登：『新版 日本の民俗学』, 講談社学術文庫, 1985.
 - 13) 宮田登：「民俗学研究法」, 福田アジオ・宮田登編『日本民俗学概論』, 吉川弘文館, 1983.
 - 14) 宮田登：『民俗宗教論の課題』, 未来社, 1977.
 - 15) 門馬幸夫：「柳田國男と被差別部落の問題」, 『差別と穢れの宗教研究』, 岩田書店, 1998.
 - 16) 柳田国男.: 「毛坊主考」『近代日本思想体系 14 柳田國男集』, 筑摩書房, 1975.
 - 17) 渋沢敬三：「本邦工業史に関する一考察」『渋沢敬三著作集〈第一巻〉祭魚洞雜録』, 平凡社, 1992.
 - 18) 市川秀之：オワリ衆の伝承を追って—近世の池構築造技術者集団—, 近畿民俗, Vol.125, pp.1-15, 1991.
 - 19) 三浦圭一：『中世民衆生活史の研究』, 思文閣史学叢書, 1981.
 - 20) 三浦圭一：「中世の土木と職人集団」, 永原慶二・山口啓二編『講座 日本技術の社会史 土木』, 日本評論社, 1984.
 - 21) 三浦圭一：『日本中世賤民史の研究』, 部落問題研究書, 1990.
 - 22) 三鬼清一郎：近世初期における普請について, 名古屋大学文学部研究論文集, Vo.89, pp.173-185, 1984.
 - 23) 三鬼清一郎：「普請と作事—大地と人間—」, 朝倉直弘他編『日本の社会史 第 8 卷 生活感覚と社会』, 出版, 1998.
 - 24) 小松和彦：「魔と妖怪」, 宮田登他編『日本民俗文化体系 第4巻 神と仏』, 小学館, 1983.
 - 25) 小松和彦：新しい妖怪論のために, 創造の世界, Vol.53, pp.6-25, 1985.
 - 26) 小松和彦：『鬼の玉手箱 民俗社会との交感』, 青玄社, 1986.
 - 27) 小松和彦：『異人論 民俗社会の心性』, 筑摩書房, 1995.
 - 28) 若尾五雄：『金属・鬼・人柱その他—物質と技術のフォークロア—』, 星雲社, 1985.
 - 29) 若尾五雄：『河童の荒魂 河童は渦巻である』, 塚屋図書, 1989.
 - 30) 宮本常一：「民衆と文化」『宮本常一講演選集 2 日本人の知恵再考』, 一般社団法人農山漁村文化協会, 2013
 - 31) 宮本常一：『民衆の知恵を訪ねて』, 未来社, 1981.
 - 32) 川元祥一：『被差別部落の生活と文化史』, 三一書房, 1991.
 - 33) 斎藤洋一：五郎兵衛用水の掘貫を掘ったのは誰か, 水と村の歴史, Vol.6 pp.39-71, 1990.
 - 34) 小葉田淳：『日本鉦山史の研究』, 岩波書店, 1968.
 - 35) 若尾五雄：『鬼伝説の研究—金工史の視点から』, 大和書房, 1981.

(2020. 4. 20 受付)